

# 鳥取県現代俳句協会会報

第50号  
令和4年6月

## 私の好きな放哉の一旬

四月七日の放哉忌。毎年鳥取の興禪寺で献句会が開かれ、会員も多く参加していましたが、ここ三年は口口ナ禍のため開かれていません。そこで今号は、鳥取が生んだ自由律俳句の尾崎放哉について、会員の方々に「私の好きな放哉の一旬」を選んでいただきました。

足羽 鮮牛

障子の穴から覗いて見ても留守である

大正十四年、小豆島の南郷庵の主になつた時 作。縁側に四つん這いになつて、破れた障子の穴 から室内を覗き込んでいる僧侶。楽しい景である。 活の時期が「日日是好日」やつと幸せになれた終 の地だったと思うのである。

霜とけ鳥光る

待ちかねた春が来た。得体の知れない渴望に突き動かされ、自らを見詰め言葉にすることで薄紙を剥ぐように執着からの解脱を繰り返してきた。「表現を必要としない境地」を希求したという放哉。この光景は心の安寧を求める旅の果てにやつと訪れた、苦悩からの解放の瞬間ではないだろうか。

和らいだ大地から輝いて空へ飛翔する鳥。終の春の空に顔をあげ、自らを受け入れた安堵を感じる。

岡 みづき

山に登れば淋しい村がみんな見える



句碑「咳をしても一人」  
(放哉碑林より)

生地鳥取に帰れぬ痛恨の思いを抱え続けていた放哉、幼いころ駆け巡った源太夫山からの街並みを重ね、肉親への想いもまた登るたびに熱くしていたのである。

植垣 規雄

障子あけて置く海も暮れきる

放哉が晩年の七ヵ月余りを過ごした小豆島の南郷庵で詠んだ句である。彼はよく机に向かって手紙を書き、俳句を作っていた。疲れると柱に凭れて海を見ていたらしい。

障子を開け、暮れるまで海を見ながら、彼は何を思っていたのだろう。鳥取から誰かが、いや妻の聲が来てくれるのをひそかに待っていたのではないか。自分の生き様に後悔なしとしながらも、口には出せない最後の願いだったのではない。か。淡淡と心打たれる句である。

## 坂出 徹

## 原 あざみ

眼の前魚がとんでも見せる島の夕陽に来て居る  
正直言うと、あまり放哉の句は好きになれません。句が、放哉の酒に溺れた落魄の人生と、あまりにくつつきすぎているからだと思います。

この句は小豆島時代のもの。明るい島の風景が、こちらの気持ちをほっとさせてくれます。初夏の海に飛りが飛んで、放哉を歓迎してくれているように感じます。

## 定久しづ子

## 障子しめきつて淋しさをみたす

一人ぼっちのカギつ子だった私は、たぶん、その部屋にいて、両親の帰りを待っていたと思うのです。

## 滝本 勤

## 海が少し見える小さい窓一つもつ

放哉は海の見えるところに住みたいと願つていた。小豆島の南郷庵で最期を迎えることになるのだが、そこから海は見えた。窓は小さいがそこから見える海は広い。たぶん実生活での不自由の果てに、心の自由を海に見ていたのではないか。

## 中田 七重

## 障子あけて置く海も暮れきる

海も……。につづいて暮れてゆくものは? 少ない文字数の表現のなかにはてしない想像がふくらむ。一切の説明なし。潔い。

あつた放哉が、手にした「雀のあたたかさ」に、命あるものへの愛しさ、共鳴が胸中に溢れてきたのでしょうか。そして、雀の命を信じて自由の空へ手放してやる。放哉の深い優しさのあふれた句で、私は好きだ。

とんぼが淋しい机にとまりに来ててくれた  
一人放浪の旅に……。馴れない炊事、洗濯、針仕事。生きていくにはいろいろ苦労があり寂しさがあつたでしょう。

ある日思いがけずとんぼが来て貧しい机に止まつてくれた。心があつと癒されたのでは……。

偽りのない心情的な句で自由律の良さを感じます。

## 増井ゆり枝

## 春の山のうしろから煙が出だした

今回、あらためて放哉を読ませていいただきました。昭和三十二年四月発行の『現代俳句集』(筑摩書房)を。同県人の誼か、一句一句が心にしみました。砂郷先生に導かれて、小豆島を訪ねたことも。

## 松島美佐子

## 肉がやせてくる太い骨である

放哉の南郷庵での句。波乱に満ちた放哉の生涯でありましたが、死を前にして“太い骨である”と詠んだこの句は、自分と向き合い、自分の生き様を素直に受け入れているように思います。

## 渡辺をさむ

## 雀のあたたかさを握るはなしてやる

須磨寺での句か。境内で、体を傷つけて飛べなくなつた雀をつかまえたのでしよう。孤独な中に

## 新会員紹介

## 藤原博志

## 秋風や大山に腰下ろしたり

小学生の頃、初めての俳句で、落ち葉を下五に「こつこんこ」と表現し、褒められたことを鮮明に憶えています。今にして思えば、それは葉と葉がぶつかり合う瞬間をしつかり観察できていたためかもしれません。

二年前、半世紀ぶりに登った大山で、心地よい秋風に包まれ、ふと、俳句で褒められた思いが甦り、無性に詠みたい衝動に駆られました。この後幸いにも、野田哲夫先生の俳句教室を経て、この度はご縁あって現代俳句協会に入会させていただくこととなり、誠に感謝に堪えません。

先ずは基本と型。焦る気持ちを余所にいよいよ季語の世界に飛び込み、素直に時を見つめ、季節の移ろいに身を委ね、愉しく人生を過ごせればと願っています。ご指導宜しくお願ひ致します。

この度、足羽鮮牛さんは、現代俳句協会より四十年永年会員表彰を受けられました。おめでとうございます。

## 四十年永年会員表彰を受けて

足羽 鮮牛

死神と共に老いたり缶ビール

死神に付き纏われた人生で、仕方がないから共生して来たのです。その死神も年を取りましたよ。現会長の中村和弘氏、特別顧問の宇多喜代子氏とは鳥取で会ったことがあります。同宮坂静生氏は「鷹」の同期だったのでよく知っています。しかし、現在は俳壇でも名さえ知らない人ばかりで、時代が替りました。

敗戦後の北朝鮮の収容所は、地獄でした。お袋と一緒に二人の妹を失い、小生はチフスにかかりましたが、奇跡的に生きました。五歳以下の子供はとても生きられなかつたので、中田七重さんがよく無事に帰国されたと驚いたほどです。命からがら帰国したその後、二十代で大病を患い、その後で難聴になってしまいました。

人生体験は誰にも負けないつもりです。句も、記憶の中の現実の再現で作る場合が多いのです。

星月夜影絵の我に泪なし

鮮牛

## 諸家近詠（五十音順）

不揃いの本の隙間の余寒かな  
春泥の記憶足裏に沈めおく  
地下茎の出口違えば別の春

滝本 勤

追いかけておいかけてしまふん玉の空  
亡きひとの表札五年花曇

足立 鮮牛

足立 六歩

中田 七重

白日の星の爆発花辛夷  
抽象といえば抽象藝の貌  
唐突に現る幽靈も戦争も

原 あざみ

原 あざみ

中年の「ヤバイ」と「バエル」花疲れ  
ピースサイン入学式の文字を背に  
隠岐を見る花は盛りよ名和神社

藤原 博志

藤原 博志

川風になびく測量テープと麦  
影像の影くつきりと夏に入る

増井ゆり枝

増井ゆり枝

笑むような犬の口角若葉風  
青と黄の国旗や今朝の緋木瓜濃し

梅見客ゆるりと巡る橋谷

梅見客ゆるりと巡る橋谷

棺の窓開けて見せたし飛花落花  
黄に染まる岡本太郎花菜畑

吉村 良子

吉村 良子

石谷かずよ  
春夕焼反戦歌吾をとらえけり

松島美佐子

松島美佐子

春愁人は炎をもて侵略す  
核心には触れず春のあかい薔薇

渡辺をさむ

渡辺をさむ

葉桜のうすき昏みへ紛れ込む  
ばいばいを覚えたる児や雛あられ

カズ

カズ

計報來し夜のニユースの花だより  
箱箪笥かけあがる猫春の宵

吉村 良子

吉村 良子

岡 みづき  
春彼岸鹿に食はれし墓地の花

吉村 良子

吉村 良子

新築の白壁ほのと春夕焼  
春彼岸鹿に食はれし墓地の花

吉村 良子

吉村 良子

梅見客ゆるりと巡る橋谷  
花どきのぼんぱり翳るウクライナ

吉村 良子

吉村 良子

梅雨の蝶來て菜園は花の園  
茄子苗植う二人所帯のミニ菜園

吉村 良子

吉村 良子

夏やかに蔭を揺らして夏の萩  
若葉風かつて母校のありし場所

吉村 良子

吉村 良子

梅雨の蝶來て菜園は花の園  
夏の月よく会う君の通学路

吉村 良子

吉村 良子



すむらのりこ

濃やかに蔭を揺らして夏の萩  
夏告ぐる子の隠れ家や草の丈

吉村 良子

吉村 良子

# 「会報」第50号発刊に当たり

会長 植垣 規雄

平成九年、現代俳句協会創立五十周年に当たる年の三月、当時の鳥取地区現代俳句協会の念願だつた「会報」が創刊されました。

その前年に、第十四回中国地区現代俳句勉強会と中国連絡協議会が地元三朝温泉にて開催されています。本部や他地区の皆さんとの交流が契機となり、発刊に繋がつたものだと思います。

「常日頃各地から会報を頂戴しながら、返札の会報を持たなかつた。これで組織としての最低の体裁を整えることができた」と、創刊に当たり岸本砂郷会長が述べておられます。

以降、その都度若い幹事を中心に編集会議を重ねて春と秋年二回会報を発行し、全会員、他地区的協会及び関係機関へ配布しております。

この間、会報創刊十周年を記念して、平成二十一年七月に合同句集「鳥取・現代俳句」を発行しました。更に平成三十年七月には、会報創刊二十周年記念の合同句集「鳥取・現代俳句Ⅱ」を発行しております。

この二十五年間の会報を締めますと、寄稿された会員それぞれの息遣いが蘇ります。又、写真の笑顔が物語つていて、吟行を載せた紙面は弾んでいます。コロナ禍でここ三年実施していませんが、是非とも吟行を再開したいものです。

さて、明日からは会報第六十号、第七十号、更にその先へと向かってスタートします。会員の新たな意気込みと関係各位のご支援をお願い致します。

## 今、伝えたい俳句 残したい俳句

12月 篠袋汝は母をとじ込めし 金野 克典 選

12月 裳袋汝は母をとじ込めし 原 あさみ

### 地区協会報を読む

2月 疫病の日々を妖しく曼珠沙華 中田 七重

2月 疫病の日々を妖しく曼珠沙華 筑紫 肇井 選

### 現代俳句の風 感銘の一旬

3月 暖かやあした行つてもいいですか 川村 研治 選

3月 暖かやあした行つてもいいですか 石谷かずよ

### 現代俳句の風 感銘十句抄

11月 無花果が甘い会ひたい人がゐる 若林 卓宣 選

11月 無花果が甘い会ひたい人がゐる 中田 七重

2月 乳房ひとつかへせかへせと雪女 村上 孝昌 選

2月 乳房ひとつかへせかへせと雪女 中田 七重

ゆるぎなき裸木空を向く姿勢 松島美佐子

### 現代俳句「列島春秋」寄稿句

11月 一尋が紐の長さやつるし柿 足立 六歩

11月 砂丘いま太古の白さ雁渡る 足羽 鮮牛

12月 鮮花の搖るるはひとを待つころ 野田 哲夫

1月 海見ゆる墓地へとづく春の坂 石谷かずよ

2月 風紋は東風の告白大砂丘 渡辺をさむ

3月 ひらがなの増えゆく川面花筏 松島美佐子

### 現代俳句の風 発表句

11月 鬼灯やサヨナラ分の空の色 すむらのりこ

11月 城山の井戸かなかなの聲湛え 滝本 勤

無花果が甘い会ひたい人がゐる 中田 七重  
指さして「お月さまおりだして」 松島美佐子

裏山の一声それつきり寒夜 石谷かずよ

雪くるか落葉松林空っぽに 岡 みづき

少しすつみんな割られて初氷 ディスタンス聖樹に仮の雪降らす

乳房ひとつかへせかへせと雪女 中田 七重

ゆるぎなき裸木空を向く姿勢 松島美佐子

暖かやあした行つてもいいですか 石谷かずよ

乳房ひとつかへせかへせと雪女 岡 みづき

花嫁に道をゆづりて秋の砂利 美保

令和三年十一月 七十七歳でご逝去されました。

心よりご冥福をお祈りいたします。

岡 みづき

追悼 松本美保さん

現代俳句協会への入会は平成三十一年一月ですが以前より米子での俳句大会へはご参加。

美保関の美保神社の吟行が思いだされます。

花嫁に道をゆづりて秋の砂利 美保  
令和三年十一月 七十七歳でご逝去されました。  
心よりご冥福をお祈りいたします。

岡 みづき

各地区、各県より会報を送付いただきありがとうございます。お礼を申し上げます。

鳥取県現代俳句協会会報第50号  
令和4年6月発行  
発行人 植垣 規雄  
発行所 鳥取県現代俳句協会  
事務局 鳥取市大覺寺二三三一ー〇八六三  
電話・FAX (〇八五七) 二四一七六四〇  
岡 みづき 方